五元集

亨

へ5
4419
2

へ5
4419
2
特

友五
松洲

信濃 鈴上

上総 佐野

行雪や四方八方見へる者ハ色
雪ハ井まるれの路よ

傘ハ月ふるとすると也
市ふるの金ものもの
名月やて住吉のつゝ路
名不月

小ゝゝゝ
雨

弱ゝゝて釜貴猪ゝの月
川筋の関五ハいゝゝ

秋月やいつをむかしの男山

水相観の絵

ふまてよめをあるる水のこと

名月や屠酒のまんと頼うり

得蟹無酒

蟹を画て屠酒する自ら

名月やそのうへの松の形

雨

納屋の雨ふるはてけふの月

名月や弁を定るむかし雀

芙蓉ちよは呆起て月の色

更しと祢宜の新や松の月

紀りいくせもあり

さうつうの笠のうらやこうの月

所思

いつまでもいつくしや十四り

名月や金ちひろの雨の夜

岡の東八吉原ハうり月あり

月出て庭低く小舟ふる

人音や月ちんとなる伏見舟

維摩の門

山のこゝハ大衆しゝう床の月

張良圖

胸中乃巻出るあゝ乃月

布袋の月を掬ふ海

わりてあゝ水の月やたなし

寺

ちの月かゝう贈ハ巻もん

名月やゝ〳〵ゆふ袖九格

烏帽子屋ハ名ハ[illegible]の月

水うれてのゝ

雨倚橋

猿這ふ[illegible]ゝ[illegible]ん[illegible]や檜乃月

含秀亭

[illegible]ま入日を[illegible]ゝ[illegible]やき[illegible]乃月

風雨

雷ふ揖ハあ[illegible]きて月ゝん舟

小野川げんきゆうふ餞

入月や長巻を袋おちさあゝん

三日糧をつむとりふ

名ゝ〳〵十歩ふ銭を握りゝう

巴江

聲のれて猿の歯白し岸月

舟中よりてをみて貸よ

さらら枝の揖よりのぼるを

月でんるも杖よつぶけの小舟ふ

琵巴行をよむ

言ずよ巴を興て夜も屋

陽の家あよ思ひおれ酒をとへ

灯をきあて除まいやすふ

村雨の心をはし私宅の耳

をそいらめ感の宮りの十三

より宮ゆそ曹保を秘曲

もしそ人を海ーをさてる

すさしもてとりよてと云

其夜雨あるはて所と色をひ

そもりもあハあくてもそ松

枕を投出て世風情乃人

一藝ハ可やきいつも

十五夜酒をのこもてはの月

あさつま舟よつみを入

月をこ

虫の所水干

虫の所水干

かりつ

かりつ

所懐　京よて

いさめ寺三心ゆ名者きよのて

世とゞまりてけるふ
はれぬまゝ雨ゑ改乃十三夜
旅泊
うれさや江尾て三穂浦十三夜
葉研てハ物悲おらすゝ家の月
住の江や夜芦ゑ吹て浦ゝて
白玉ゝ芋を交さや波乃月
なの目上の太ゝれ面波乃
ゝ
ゝ
ゝ
十三夜を
やゝ月ゝ波乃物ゝ木樵
国ゝ十五夜 おなじ夜ハ
御番所ハ照月ゝ
平家
宿ゝ
柴ゝ
名ゝ
名ゝ
待宵山
ゝ満ゝ棹ゝ

喫不逢窓

国の灯ともす光るを限や袖の月

一休の狂詠自画を写す

甲申 俳師ゆふ相物をして月みす

松前のうみまや

送り行

こゝろあらん大根て清さん秋の月

十六宿ハ儒者と名乗る

漬蓼の語よりも月を名あるふ

四十三夜

貧の菓子ちつて寒き月かな

病中制禁好

拷物乃事ハ嵐さうすや月の友

秋の宅此

汐汲を加へてみそやけ月

常国比月をうゐるを

芋ハ〳〵 凡俗都の二百貫

ゆ[illegible]

物うらとまる豆うり袖の月

鐘声客船

名月や市堂の鼓あまて少

遊子ハ[illegible]る松の光も江戸の月

鳥羽殿にて弛を見て詠る月

玉津岡の侍従

わかのうらに袖の月をあらはいさよひや龍眼肉のつゝみ

上皇詰上

平家こたへ奉る月

吉野の山のさくら

こよひこそ世をそむくべき月

敦盛の月を所や背を

九月廿七日の月を惜

月や大うちはらをはらを

石ト家の月を

文月や陰を感ぜる夜半の中

七夕や暮方あはれて留をも

星合や山うよ痩せの瓜つくり

雨夕

散や石をかりの橋もなし

星合や黒き星ぞ雲ぬ

新居

涼樹ゆてうつや新河

天川けふのはしや一夫婦

[illegible]

踊子を一目そいつく星ハ北

仏庵

刺請も廣ふ習をらけ引
無くに松つけやうむく
二星ハむ隣のもあ事五
かさしやあたのよ元川
星ハや栄のまそこ夢ハ
ハ[illegible]やはえるる言軒彩
北鄙の冶郎笠れ星むく

地獄子のうて
星ハひや双林婚去紀去音
橋と成烏ハいつ色タのる

七月彩の銭肅山子

あひて行浮る簑を拉し相の秋
菖蒲や角立も星花むる
小娘の生ハ考ハこの世躍

小金吹〳〵荒人の筒の力て音
静さてそもさも逆櫓もやるや　宗牛賣
玉川のあの絲
このしらべ〳〵

水源の曉起やすやすみ　鶴

増上寺晩景

馬老也灯籠使のたまへ
芝〳〵ふるあらふ雨の
形水の数くよりも濁る筆

弄化注

あしろの子家とりまや天川

枕経よみの問いかけ　侍の
袖よりうの授記号の有無價宝珠
と設せ心をなりて
衣の縁もしらや玉ゆり
永代島あそ
鹿山史を芦のていけや玉迎
動すりの門のら食乃釈とん
手のふたしんや隣の玉ゆり
得平酒
洲股の蓮あつめや生弟玉

柳陰やけあつきはなれあり
見るへしも点て灯籠や四り〻り
道りやや宮の燈十文字
千くと黄葉や あるふ
谷ふかきの〻ふ山乃三人ふ
稲つまやきの〻ふ赤ふ面
妻よ知れて なたまれるんさ
いふつまや思ふもいふも鈴もも
伊勢の鬼ふ色しあひる躍ふ
まるまや 宵暁の 舟出の色

舟興

きさらり花火百も あき光ふ
扇的きふ火ふる鳳ふ
妙よ百三命を悼て
打折よろ〻ふ秋のせを
思ひのく〻きんつやせをの宮
悼コ齊 何
其人の鼾ふ秋の蟬
投られて ひを やり世お撲

あさ衣の薄いやおもしろ
ト石や志ゝよぬれてさを撲

祇のしや賣やお撲札
相模氣を髮日作の久ゝ
山城のおもし淡ぬ形や祐西凡

新題 弘誓寺

赤屋や六尺八唐めた
中の御ゝて
幸ゝ雪の降ゝきや昔松

雨後 二句

ゆ多ゝる芭蕉よのうてゝらゝゝ
弾ゝて雷宮新よゝゝきゝ
葵の日陰ゝあり中夫毋
年ゝの立ゝの人ゝ毋ゝや子の物
蝶のおや蔦をうけて少行原

いせせみうけ松

種竹 三年

竹乃竜許由ゝひさゝゝ清
つゝゝゝ乃ゝ庭の秋

長崎を笑顔にかりて
角みつやいせの肥前乃花屋
巴汐のらしの海や新の雪
芦の穂や蝋をやとしてれぜん

宮至

なる池汐ふるの堺や夏のむ

暮蓮とらふを

夏新よるふるふる年のみち
花をしし伏見の屋乃夏蜜
酢をしあるを隣の夏の花盛

三度なる納
豆稲酒や稲荷よりひかれ姫
庵のうちや芋ふくおう屋辰
頻拍や[illegible]ハせ人よ出[illegible]
野店無看板
是あるる亭をよへて新酒
酒買よりうる夏の屋孤ッ

沙茅ふて
化野や焼のうしの骨ハう

春日法楽

七夜日秋の宮居をうしろ
四所の宮〳〵おそくにやのぼる
戌の刻ちかくをかきりとし侍る

野外夕虫とうふ聞めて
晴始や狂ひまつ原ふるの月

相模川洪落水接天

狼の浮木ふるやあれの月
二挺立の帰掉
繋を始ん花つまぶ星の家

鶯啼や松はあるひの清風
こはらしきの聞まて
甲斐路や江戸にくゝと抑ふたう
訪来や岩ふみて元箱根
みの笠をしへて　素牛まて
旅さらん孫ひとり志津風雅
なるも者のもとまて
中ぶらるふ孫ぬ子参へ内と旅

和尚の行宅

さい槌の音を仕まつり礎うる
奥好乃殿やうつくしの衣
きぬ里小野の虫はゆりて
雪雨ハ屋もるもおもしろ
華や 御華のなとの眉つくり
ありしらのやうにする扇
関守の心ゆるすや栗かまて
大和路のやまとしたいて
泊瀬めふ柿のあつさを思ひ

嵐渡山

清流や渋柿さいす家心
華 浮や山のなもとの虚学者
め中の華うを
華 浮や鼻のしるる高かるさ
舟中
あい山の中生る華ゆや 秋の雲
秋しや 弱もゆるぬ 鞭の上
稲葉ハんよ待てへすうと河
蛛の元 庵上の杉をもるをう

饒新脫

諸聲弱ふ所ある脇目の家
松出よ孤をうれたる色

栄西といをうりて
松ゝも隣もあるものの竈
すゝ月や鮎をうてする蚕

夜ふる山

陰出や松ゝ之へ荷をせて
山川や松よ越ハ所ゝ家のうち
さらさらと手ぬ山田の時の夕ぬ

二見あて
岩のうへ赤風宮をれ落

長谷都

山畑乃半ばるなるた 仏花ふ
川芦の色ゆ谷乃ゆ

遠ゝ別二役川ゆ舟ゆて
逆水大切所をこて
行櫂よ魚ばゆうう淵の色

一夜前載といをを
伊勢へハ伊よ入やらをみゆ

切想亭にて

日盛を雨風軍とせ萩ふ汗
ものいて唐
萩落むすひかいや ササ芽
既松亭
獅子の舞の胸分みすふ 色の萩
根ろ亭
ぬしより四い雑の間俳て たきしみ蕪
井筒を眺しる蛍又
いそぶらこ竹輪ふむすふ落ふ

田家

庚申の卯うみ搗ふ籾種ふ
麦畳ふ稲ふ窓ハふ掃ふ

餞青流雅俳

芦刈のうらを吟せて旅ふ
隣家よりと招こをを
大絃ハ晒に元結ふ為る雁
元結のゆるさるを虫の声
お亭二亭の貝をとて
ちけ出乃貝よりて別に形酒ふ

常香月竹を憐
古寺や 洗紙かすん所ふ
攻府市番よ旅ちの百姓
ちりよ 物干こつも水洗 桶
同仏石玉まこ所かあよ詩の
萩すりや 傘にらに 背鞍
あひひのうへのな
花ふ 赤太郎
三栗のうへ八ちり寺や 角被
在原寺もて
俗口半の志つうもむ巻ふ

松のそみそ史そけ巻
感徹和るみまに
そしまや 鶏ひよ 玉ひ
品川沒鉤
屋の販人送るそや 舟乃上
白雲そう壱の遠ちる 数ち屋
むすめ 冷そめそ
貶時や 赤子の頬を吸ひ
呪検ようい 百合の声
泥鰌の野よ 遠ようみ ト

詩の色上京

うゝ柏よ花の秋や如何

ぬ是景のこゝろを

二子山二子ひゝいん栗のうゝ

尾引浮塩ゆゑ

蕪もおもしろみうてうて

賈岡や雪のしきる時海

鹿の一声とふうゝの

子ゝを誰ゝ伴そこなて鹿の声

ちはやゝ面ゝ色よりは流

水迫あて

門立の秋くふあるる男鹿ゝ

小原せやゝ紅葉そゝく苔の屋

秋葉禅定の時

合羽着てゝ苔よすゝるやあきハた

下山

ゝ〻ゝ〻ふ杖を投ふ所ゝゝ

芭蕉翁岩蘭を悼める詞あ

嵐蘭一子孤然をなそれむ

芋の子も芭蕉の形をかゝふ

めなれぬ物にて
おなじきものを
なりぬ八思ふまゝに 新菓

二月堂のまいりの事七日
潮食の僧堂のさいの事
行ふ忍をなして
日の目ためし始めてに拾ふ
甚五郎つゝ
此度狂言せをつゝのた
産宮坂にて
兼好ものもの聖なりけり

戸部山庄

山ゝ程荘の実をはしく白ク
ゐちりて葉ハ橘を拾ふ
あさふ山に
答へつけ 康のおもきれ 拾ひ
三条橋上
片腕ハ都のことにあるか
あらんへの花ちる
五条ハちる酒のん
山姫の深う流にあみちる

箕根

板の上よりてんてんら村を築
高雄にて
中新雪文覚もをろせし
泊瀬にて
桂こんぼう家のおもうハつせ山
山路
乙後よりおもはくしらるの山
いせをして
おもをして能無の拓とひら絶

旅思
卯句

南てやをのつこれるの山はおく
南天の実を包めるや厚の色
南天や形をうばゆる小倉山
こんの山乃絵ふ
笈の角梢のなるふまつれきり
七十の縁もそそるすうゆるの度
ひつしこに稲を手形や大井川
山の端をやんまるへすや破れ笠
水鄙
唐粗を流て岩や和こん舞

富士
笠かしこ富士の雪ゆ笠
なる雪や[illegible]
背面達磨を画て
面帝ゆハ留守とてこしら
旅思　二句　新の風
こゝつくの指南ゆ新の香
みつくの[illegible]ゆ人ゆ[illegible]
召[illegible]訓ゆ方ゆ花落
うゝ花ゆ[illegible]ゆ鮮ゆ[illegible]

本多下総守ゆ
市ゆ宴

後園
いそ[illegible]の庭ゆ燈掛菊の名
まの内ゆ[illegible]
旅ゆ
駕籠ゆ濡て山ゆの菊を三[illegible]
志ゆしゆ[illegible]
荷ゆ[illegible]
土[illegible]ゆ[illegible]ゆ菊
きゝゆの菊小ゆて[illegible]ゆ好
きくゆ[illegible]ゆ[illegible]

白露の碁石みありぬさくの雨
雨重――地より這菊をせんれん
こハ誰よ雨ののうりは　袋菊
素堂　秋菊の屋ゝ
はぜ菊く十日は閑乃亭主あり
昼菊
さく白く蒼ハ陽ふうねう
菓苑
菊を切ふ陽ふるまあうう
水鼻　よくさあこうう菊艶
病起　千山ヨリ菊ヲ乃て

大母衣乃ゝしろを抱や親の菓
こ咲るあて重陽
門酒や一ゝ玉の脇乃ゝくをあ
宮川の孔ゝうハ酒送せゝれて
重菊ふ花ちぬの野　菊ゝ
みちとせのゝ乃名よ乃ゝくの笆
おゝこげるゝ乃ゝ
いゝて我七百の帥走　菊よ　乃ん
竹苑のやゝふゝゝて
うつ
出世者乃つ　ゝ乃ゝ花奇ゝを
翁ハひゝ　ゝ乃ゝ菊
時服菊ハゝくは笆ト

十日菊

[illegible]殿 十日の菊をかまてら
女子をいとけなくしてよりかゝる屎よりうまれしの姉ト

十日菊

震寡の[illegible]ふ菊 贈
笠きしら西りの冨よ

菊を着てワちさ[illegible]芳しや
柚の浦といふ貝ヲしよ

白菊を貝の穴よせん祖の浦
那波[illegible]九郎[illegible]

御迎えの[illegible]あまりて
大ユ[illegible]の久し[illegible]く新や 神の秋
御[illegible]ふ[illegible]てなりて
御稚を[illegible]て髮[illegible]るよ[illegible]
内宮 庄[illegible]神の[illegible]拜[illegible]ふ
[illegible]の姉ト 赤ふもおいる祇園山
[illegible]
日八時を古殿八[illegible]の[illegible]ト
いつ[illegible]
[illegible]
大[illegible]小判[illegible]て菓の[illegible]

平津川をて

花はなを祭主の惠を送りそ

冠屋公使ひとり祝まて

初鳥墓ハ場をれて百足持

周位の亂の屋よ

白鳥を一升入乃めくをて

平家の墓を浮ふ

かへつて福原懸らて立

元祿辛未のとし大山樓島八系宿

和川　祭りお書略之

品河をつれめつれ原の市

とろ〻の

稻塚の戸塚をつく田守ゑ

蔵沢

宿とりて東を見や元の月

いせ原

よろこを離くの蕎麦　畠

御句松まて

生栗を握はめる　山路は

大山

衡押やうる岩根乃ぬしの

石蔵する茅僧

手の提し茶瓶やしめて苔の衣

二間茶室あり

白雪の尾畏やうるたるさ

由井ヶはの

釣竿の一のるおやはのおと

雪乃下やもとうて

[illegible]

霹靂乃古樹のもとまて

[illegible]代の供奉の崇や[illegible]る

横山追悼

一歌をよみ向よとやう　野糧

酒ゆる間を切[illegible]

一家を探るゆる間を

あいせ[illegible]　あををたてその家入

自画賛

下道八十つ一人小田の原

秋のくれ祖父のおくりてのこ

白扇倒懸東海天といへるは
つまびらかにきみ菊てしるよ
みさきの立おかひて山の半腹より
ひくらしをきかんとなりよりて
いはんも侘なるなりよりて

白雲の西又以来や普賢富士

夫暁吟

雞つくよ階ふみ立てうら菊ハ
洞房の茶臼茶色の笛を
ぬけうりうせうを悼て
ふるふる笛のあるハ塗ふく殿

悼朝叟

四人ふ二百十りハあれ雨て
吉田氏

唐衣も糸をとれらるま向邦

芭蕉翁十三回

辰雪や風尾の京おそれよりも

宝永三戌十一月廿三日

妙丸童女を葬りて

雪の降去るふるえも被されぬ

世はかりそめ雀子寒さ

立ぬや祖翁の面影乃秋世月

玉津流

師弟を拓ぬ雪しりぞかれ

高野まで十月三日

卯塔の花表やけるも秋毎月

夢ぬし原行ぬかりや雪の面

仏も寺ぬと問ぬ面ぬる春の鐘の声

竹雨や葱畠乃　斤柳

芭蕉翁三回

[illegible]や[illegible]も冊子を墓案

[illegible]舟[illegible]や[illegible]田の[illegible]

遊金剛寺

八[illegible]の樹の枝[illegible]

義を[illegible]て[illegible]

大和めぐりせし比

むら[illegible]論の近[illegible]

芭蕉翁病床

吹井より[illegible]

[illegible]柿の夕日[illegible]

[illegible]猿乃引窓つ[illegible]

[illegible]酒[illegible]

[illegible]

[illegible]

小[illegible]

富院[illegible]

中[illegible]小松[illegible]

箱の[illegible]馬蹄[illegible]

[illegible]形容[illegible]

松[illegible]

[illegible]息を[illegible]

世そちるよりの屋を
たやすく
三尺の刃もて西河乃[illegible]
本多総別公平信庶[illegible]夜
むら雨のひとしくかゝるの
ゆるゝを殺るせんと仰しまさ
蝙蝠や柱を抱くに一人通
守山のふもとを青時雨
こゝろ月のおもかゝぶ祖よ去指ん
ちゝ小弧つを清水ゝ
揚弓ゝ月のるやゝ
非の旅酒匂い指とめおとり
家こゝ乃道やる居よるし大社

大和ゝ[illegible]せ比
ゝゝゝりの城の寒さよりの山
使者猶書院へ通るさむさ
井波門主應心院殿
あるとゝ[illegible]ゝ山乃二集
ゝゝゝ[illegible]

風や沖よりきゝ山のゝれ
ゆゝしの家ゝて
御流乃勲乃ゝふきて
紅葉の下に旅ゝ[illegible]
去指ゝや祖父のゝゝ桜形萩
く祈の者ゝ[illegible]

つゝ綿にて兎の耳をうゝてる

大町新宅

あれや　鮑つけたのふ時雨

水仙や　形ふりや　星月夜

雨や　ゐるけしや　狐の尾

拵へ　拵へ　拵へ　拵へ　拵へ

父ら醤油あれて　戯よ

鮑汁よ　又本州の　味噌

河豚あゝ　水のまうや　下ほ京

何のけん　藻魚は　白みそ

表戒十九日うゝ（ぬ）

大黒のうゝ家にて

酔ひめて　大黒もん　夕ゝ

おふ板よふ判　板うゝ　夷講

糸屋十右ゑ門宅にて

清源山や　都ハ　酒の肴か

人まハ大根はうゝを　鮑汁

お猛よ　鮑も　ひすの　笑ふ

生煮をゝ　ゝとゝ　ゝゝ

世中よ　鼻をよゝ　ぬゝと汁

日本の風呂　呂ハ　比叡山

かけぬの演おめてて
純ひらかとうとうまる網引
幻住庵にて
雑炊の名とそあるを家
蕪汁や素のみたもとを絞る
宗隆尼みほとけのまま
千野おんて雪田のとを
藻の中をおとる食やせきの雫
蛍の刈蕪おりやこんるあなき
松葉ちる鍋のかるや筒汁
清けやや祝をのこす紙戻り

この一つ家をあるもおんあるも
柳つきくちは昔の憲法
霊山のみちを
かなのそりのうをを死ぬ拾遺
生涯和五上京
鶴の来乃扇名ふこの一つ家
堅のこのやうにの槍のおりけるを
鶏鳴法は信者ゆん畑の雫
浸るて
神童子絵とあるを舟乃中

きりぎすや　柏原乃介日
　周鶴
　　ゆるるまて
　　の〜ひとる三井の二王や　みを示立
風や　勢田の小橋乃　蕎麦　渦
　芭蕉扇をこん　色てて
　　を拾ちを子　みつそ　蓮や　むロ
　　石菖の　高も　ゐれ　や　小　若
　　か生の　つ　の心つのひを　ほて
　　海　る　ん　孫　ん　孫　孫
　　むしせ　恵の童　や　ゐ　ゐ　着

起出てすきけき方や足袋部
寝ん　やこ　ふ　ん　さめ　中
袴子　着て　ん　部　も　こ　ら
　長途　狂倡
　　子　て　る　も　大井川
　　目ぱりを氣　部　の　世
　　出　おゐ　る　色　月　し
　　ゐ　ふ　く　を　隣　ぬ　れ　き　り
　　け　木　や　須　の　さ　れ　て　ゐ　の　月
　　ま　や　二　を　き　て　京　乃　夜

新宅　二句

竹の場乃庭めし炭俵
鼠みもやをとしまを爹
きをみ三十五りよ
おぼあぢはひすさめ袖を納豆汁
霜月朝日の例を
法人や嵐芝居を爹
如祢の市庇
人ちをんをのてゝぬもタ涼
郭うせやも暁いさむ下邸の梅

郭公愛新見七十の賀
白河の波をかゝせや桐火桶
幡別あち曲ゝ一倍のすき
あるとゝ六十年の栄花を洛
潜子ときいあて弥りを取
ゆるまに弥を走ゝ
より竹ゝ伽るみしるみ
栗飯の焦て白ゝや素の声
法雲寺老僧春色と呼ゝり
原ぼりやゝ雪水の家の庚講

はひ〳〵ちを猶永住わいろ小
蟲のまよ白のこゝゝ哉の菊
拾ふ乃為の切とて決まず
鬢の哉木賊のひと束拾ふ

芭蕉のとう其根うをけ多構
蛇のうせ貝を盃よりて新多
とゝなしうるゝよせて
炭賣ハ炭こてたられうゝこゝ
柯求新しのよ向
山茶毛や猶もれうゝ盛柏

猶く除ふゝ
みうゝれて木綿ハ陽るあれ小
山行
山氏ゝうゝ嗅出に雲主こゝ
みそ知ハ猶くゝ池の鴨
寒芦 画讃
何ふ宿きしく似家いそけ哉の鮮
氷すもし蟲ゝうゝ 鴛の中
住吉
世毛の柴をよすり除すゝ哉の陽

周防のを才ほうしまて改
ヲ行ふよ一生涯あ〳〵ひるゝ
をめて〳〵板〳〵とのとやとや
うのやすやけらる湯ひ
ひろひ出す事

炭焼うら青鷺う鉢を拾ひう

仁年おあ〳〵る炭鉢を幸の
ものうるうと

忠義と所よう〳〵炭鉢ふ
名もうしたのうとふ下〳〵事
鞠

炭ようふ弱んのめう〳〵手樽ふ

三年成就の用ふ入

焼つ弁や汁をよふの金のヲ

炭竈之可

炭やゝ子のの猫てはうし爺のを
炭うのや玲木竈井う好の松
炭ううや脇の法ふ鼻ちゃん
炭竈や煙を吹けて猿の声
加すうも其木架すう多う
うつゝやのの車をきけやちゃく
切やよ羊やく人を薫に
炭屑みいやうゝ比る木おを
ととあ〳〵かの一車とのの炭

寒蝿炉をめぐる
悔おれてかうふるふの蝿
口切や袴のひびよ徐蘿蔔
横庫某紙田一反かるな
粕至の宿まて送侍て
てよ春を待つ一組代る
不居安慰
夏〻響の蛸をおさめや原せてり
山中 高客
袷巻の松よりるや三種の肴
並蔵ハひ〻きの鼠や寒作り
十石ハ駕ふつく〻作りあんる

角川や作のすいる舟の京
用侍橋
うしろ〻ゆや澄もふる橋柱
除幅や水の中よりすり松
朝一ツ切ひ乃ま乃ま乃京
煮炊や簀子の竹乃〻す硯
第女
内蔵の古酒をぬ〻らや室の梅
市隅の侍へて
宮莫ぬはて有まて矢倉賣

揚屋のかこひにやよはまの
野に毛ちれきえて
野の色や紫の衾乃夜さけ
仕事や釜にゆるしふあまる
浦御にて明石と　大和鴨
網代をよをまみん座の古筵
塩椿子や投てくる〳〵ふ磯御
よき日和よ月のくしあやむね御
妹らは嵐の足のはなちより
　薩摩山にて
此頃の猿首も限のゐまめ

摂津麿にろ地り第一の舟
　京なるんには案内して
名にほふし飛ばかりにやこゝろ
滝口やかましい捨てゝ池乃鷺
　人丸講　月次に
沖の帆も十ゝしことや浜にゐる
　本国梅土　二句
晩の鐘はまくらや寒念仏
寒念仏棺をこそれも祈りつゝ
酒飯の飲酒いのりに寒念仏

去来家まで
千々らわかれ行こそ弥加
ことく九ぬそへハやしし張加
南都よりそへる
寒壺や東大門乃ゝ月
ひらゝ帯のなゝりもと
おりひよりをなりてく
ゝれと立ゝ孤独すんて里神楽
多神楽や鼻息白き面の内

雪買ふ声を法さや夢の雪
清水寺
むらゝ雪の寒壺の昼乾色
知恩院町ゝ宿とりて
初雪よりおのたゝうの寒ふ
大津より
雪の月や船路の新の色
ひらゝの宿おて
馬ゝよ貪きふ雪の宿
寒山のさん
ぬる恩ま門の雪はくを食ル

西運寺興行

初雪ふんだものるの伏見舟

雪とあるもへは旌し笠のうへ

きんぢゃや赤子まんする名詮

はつぢゃや　雀の枝折の小土瓶

門とりふ字を白く

雪ふ炭ちそはあけ雪の門

燒屋

窓銭のうを世を面白ゆきんふ

宮城御普請成就して諸国

市廛美あり賑ける比

陪臣ハ先買臣しゆきの袖

芭蕉を訪をとらを

義老ハ笹の葉もあれば　庵の雪

門の雪　椿ばかりやとらまとり

山居の俤

雪ちぶて猿り茶を煮りた山る

かも川よ一面れとうみうと

釈かとよふ既も雪の黒木ふ

ちをとちをちるる女のあし名

酔吟

雪うちゃやりまをりす小忌衣

望叡山

降雪や大の字枯る山の姿

戸障子のかすかに雪し松乃声

かいかしや竹田へ帰るゆきの雪

旅しゐ女主作をむすべしら
人手ならとくぬてら

黒塚の容あしらしや　国乃宮

立徘徊

はつ雪や内よあさうふ人も誰

めつらしい地ふまた恒めふ

鴨川の鳥を談論よ雪らんふ

動原方より雪ふんのむくさを
ぬ雪上や

初雪ふ炭やえうれて江戸ふ

楠の釣壺四間ふ一間ふ
万客の居をうるせた

たつ雪や湯のミ所の大羽壺
ぬるすうい川と云ひうりを

半袴の列濃ふ雪の松
人も来ぬ夜乃独酌

初雪や十ふ所ふ酒のうん

軍兵を国岸てふつや　雪碑

松の雪ふ苔ふつ乃ふりきり

前とうて雪の日
觀覽の人おなりてけふの雪
初雪や白魚のうをかあり
出ぬ　〃
きめ〳〵よ大を拂ふや袖の雪
はたてものの部ありとふふをて
ちもんめや拾てあるふ雪の宿
市中深
初雪や門ゟ橋なる久ちくき

不分當春作病文
病あり正を病を悟ふ
極月十日西の大坂の月よ
いとしや足袋賣よ多とうつの山
新蝶おて食ふやうよ所走ず
餅花や灯もとて　至の祝
餅と民と宿いきてうくてるて
やりくれて又や狹道馬のくも

書しるしをかとしはすの巻柱

座右銘

いとまなくとりあつる員書

乳母ふたりたちも数女の年忘

御前の中殿よりくしかり

のうあの中より職源

年高刈伯倫をあはせて

震風流決たるすりて

妹うとめ薑とけて餅の番

媒掃てぬしあふ女房めつらや

京にまをもつゆる年

おつるの物お問ふあり

乃牟の牛にひとうまのる

臘鬼五いのるを産り樊中よ

すはふたりてるかけるへ

年をとる鬼よ祝へ鬨め豆

すはひの源と伝て世拵義

童あはたこの既中や媒ちい

忠信う芳野仕ものはるは

有がとき親の恪氣も始戸

雨窓より羽箒をめて
煤こもりとつもれる人の陸奥
鼻を掃孔雀の玉や煤こもり

御煤ノ翁ハ竹取

千山寥々高木
別すもやハ女神楽男より
揚屋で酔伏して
意の手義紙籠をたらへり

夜の市をれをよろし羽織ゆの
小作城作をしなんと北嶺
山陵の寺方を踏ふすしふすか
女子の地蔵ほうけ赤子
餅の粉や為雪こる赤の咲
作高云百万沖無作巻油
手の作乃ノをなげう赤米粉
市隅
弱法師赤門ゆを餅の札
地蔵堂の夕日寺門を北嶺

梁与松あるよ市の夕ばえ

自悔　三十

みをのゝさハ身つゝあるへき身の思

大津譯

千觀の一るもせハしやゝ乃雪

雪窓

槇料の史記を卯花の雪ふ

年の暮や　ひゝめのむ格の物思

行年や　貉評宮　為明之